

毎日新聞社

定本
高濱虛子全集

第十一卷 俳論・俳話集二

〈編集委員〉

高濱 年尾

福田 清人

深川 正一郎

松井 利彦

山本 健吉

定本 高濱虚子全集

第十一卷 俳論・俳話集(二)

印刷 昭和四十九年四月二十日

発行 昭和四十九年四月三十日

著者 高濱虚子

編集人 浜田 疏司

発行人 朝居 正彦

装幀 熊谷 博人

題字 矢萩 春恵

発行所 毎日新聞社

100 東京都千代田区一ツ橋

530 大阪市北区堂島上

802 北九州市小倉北区紺屋町

450 名古屋市中村区堀内町

印刷所 図書印刷
製本所 大口製本

第十一卷 俳論・俳話集

(二)

目次

俳論・俳話篇

客觀寫生時代……………

粗末なる「新」の字……………

俳句所感……………

寫生の二字……………

「雜詠選集」雜記（一）……………

「雜詠選集」雜記（二）……………

「雜詠選集」雜記（三）……………

「雜詠選集」雜記（四）……………

「雜詠選集」雜記（五）……………

寫生俳句雜話……………

芭蕉の境涯と我等の境涯……………

凡兆小論……………

新は深なり……………

客觀寫生句の面白味（濱人君に答ふ）……………

寫生といふこと……………

子規居士の寫生／壺 自然に絶大の價值／允 純理論ではない／〇三 客觀句
も主觀の領域／〇七 寫生を説く種々の場合／二〇 柳緑花紅二三（再び）客觀
寫生も主觀の領域／二三 又／二四 技巧／二五

九 二 三 七 九 二六 三三 四〇 四三 六〇 八一 八四 八五 九五

俳句小論(上)	二七
(イ)十七字の詩／二七	
(ロ)歌の上の句が獨立したもの／二九	
(ハ)何故五七五	
ぞといふ問／二三	
(ニ)歌とは全然性質の違ふもの／三四	
(ホ)客觀詩(上)／三三	
俳句小論(中)	四〇
(一)客觀詩(中)／四〇	
俳句小論(下)	一五
(ト)客觀詩(下)／一五	
花鳥諷詠論時代	一七
花鳥諷詠 講演筆記。虛子句集序	一七
自序 この講演筆記を以つて序文に代ふ。	一七
花鳥諷詠／一七	
芭蕉の句を三種類に分けて	一八
秋櫻子と素十	二〇
俳諧趣味	二七
寫生主義	三三
繪に空白を存する技法	三九
立子へ	三三
俳句に志す人の爲に	三五
十七字／三五	
季題／三五	
富士山にしたところが／三六	
歲時記、季寄せ／三六	
や、かな／三六	
すぐ句作にとりかゝる／三六	
題詠(一)／三六	
題詠(二)／三六	
寫生(一)／三六	
寫生(二)／三六	
句會／三六	
吟行(一)／三六	
吟行(二)／三六	
花鳥諷詠／三六	
和歌と俳句／三六	
昔の俳句と今の俳句／三六	
花鳥諷詠の旗	
幟／三六	
尋ねれば尋ねるほど／三六	
古壺新酒／三六	
自然詩／三六	
新らしき	

俳句趣味／二五 頗へる感情／三五 深は新なり／二五 作例二三(一)／二五 例句二三(二)／二五 例句二三(三)／二五 作例二三(四)／二五 作例二三(五)／二五 作例二三(六)／二五 作例二三(七)／二五 九牛の一毛／二五 現代俳句(一)／二五 現代俳句(二)／二五 現代俳句(三)／二五 現代俳句(四)／二五 現代俳句(五)／二五

立子へ——花鳥風月の革命は出来ぬ——……………二五

俳句は花鳥諷詠詩……………二五

上／三五 下／二六

私は矢張守舊派である……………二七

俳句の概念を與へる……………二八

子規時代より今日まで／二九

東風漫語……………二九

『俳句讀本』抄……………二九

俳句論……………二九

俳句は文學である／二七 俳句は詩である／二六 俳句は抒情詩である／二六 俳句は紋景詩である／二六 俳句は花鳥諷詠詩である／二六 何故そんな分類をやかましく言ふか／二六 花鳥によつて感情のやり場所を見出す／二六 季節といふものゝ世界が目の前に展ける／二六 傳統文學として常に新たな事を／二六 例へば都會美、機械美の類でも／二六 絶えてなくして稀にある文學／二六 日本人は皆詩人である／二六 寒來暑往秋收冬藏／二六 正しい意味の花鳥諷詠にひき戻さなければならぬ／三〇 俳句は十七字詩である／三一 切字／三二

消息……………三〇

熱帶季題小論(上)——箱根丸から……………三〇

熱帶季題小論(下)——箱根丸から……………三〇

熱帶季題小論補遺

三二

洋行雜記

三二

花鳥諷詠を説く／三二四

二千六百一年句話(一)

三六

俳句／三六 發句／三六 獨立した詩／三六 發句(再び)／三七 小句／三七 發句(三度び)／三八 俳句(再び)／三八 俳句(三度び)／三九 無季／三九 自由律／三九 俳句圈内／三九 川柳／三〇 共に關心を持つ／三〇

二千六百一年句話(二)

三三

發句(四度び)／三三 俳句(四度び)／三三 俳句(發句)本來の姿／三一 俳諧に還れ／三三 俳句本來の姿(再び)／三三

二千六百一年句話(三)

三三

我國特有の文藝／三三 新しい芽は舊い株から／三三 俳諧の裏・二の表／三四 俳諧(其一)／三四 俳諧(其二)／三四 俳諧(其三)／三五

二千六百一年句話(四)

三六

俳諧(其四)／三六 客觀詩(其一)／三六 客觀詩(其二)／三六 客觀詩(其三)／三七 大自然(其一)／三七 大自然(其二)／三七 俳諧(其五)／三七 俳諧(其六)／三六 俳諧(其七)／三六 俳諧(其八)／三六

二千六百一年句話(五)

三九

發句／三九 連句(俳諧)／三九 連句／三九 連句(俳諧)／三九 發句／三九 連句(俳諧)の事を知らぬ人／三九

二千六百一年句話(六、終)

三二

再認識／三二 花鳥諷詠(一)／三二 花鳥諷詠(二)／三二 日本俳句作家協會／三二

寫生句を作る場合 寫生句を作る時分の心得一つ

三三

句を選まぬ親切

三四

——立子へ——／三四

理窟はいはないで實行して見ること……………三三

——俳話——／三五

季題の活用……………三六

——俳話——／三六

現實を強調する、美しき夢を描く……………三七

——俳話——／三七

升さんに申し上ぐる……………三八

花鳥諷詠ならびに寫生といふことを反覆する……………三九

國土禮讃……………四〇

座談篇……………四一

俳談會……………四二

第一回／三三 第二回／三六 第三回／三九 第七回／四二 第八回／四三

漫談會……………四四

第九回「短歌寫生の說」——俳句の客觀寫生／四七 第十回 和歌の主觀的描寫といふ事／四九

校異篇……………五一

解題……………五二

解説……………五三

小瀬千恵子……………五五

松井利彦……………五七

第十一卷
俳論・俳話集
(二)

凡 例

- 一、本集は、新聞、雑誌、単行本に初出の俳論・俳話を用いて底本とした。
- 一、各論の末尾に初出の年月日、新聞名、雑誌名、単行本名を附した。
- 一、校異篇を設け、本文と単行本所収の俳論・俳話を対比、異同の個所を明らかにした。
- 一、この集に関して校合した単行本名を記すと、『高濱虛子全集』第八卷・第九卷・第十卷、『定本虛子全集』第六卷・第七卷、『俳句文學全集 高濱虛子篇』、『昭和文學全集43』、『渡佛日記』、『俳句・俳文・俳話』、『立子へ』、『芭蕉』、日本評論社版『俳句讀本』、創元文庫『俳句讀本』、角川文庫『俳句讀本』である。
- 一、本文は、底本の用字、仮名遣い、誤植、ルビは原則としてそのままにすることとし、誤植にはママを附した。訂正は校異篇による。ただし底本が総ルビの場合は原則として、ルビを削除した。
- 一、難訓については初出の個所で新しくルビを附した。

客觀寫生時代

粗末なる「新」の字

これはホトトギスにも書かうと思つて居ることであるが、俳壇の先輩であつて兎角青年の前にオドオドして居る人のあることを齒痒ゆく思ふ。革新の業を成す者は青年の力であるといふことは私に於ても知らないではない。彼等が何物にも拘束されまいとする若々しい力を以て、盲滅法に突進する状態は側から見て居ても氣持がよい。壯年以上のものが動ともすると前後を顧慮し引つ込思案勝なのに較べて、其青年の潑刺たる状態は何ぼうか氣持の好いことか知れない。併しそれかと言つて始終青年の前にビクビクして、其青年の抱いて居る文藝觀に直ちに雷同したり、其青年の使つた言葉をあわたくしく使用したり、戰々兢々として其青年達から「彼は老朽者である、彼は時代後れのものである」と言はれることをひたすらに怖れて居る傾のあるのは頗る見苦しい。青年は青年である、壯年は壯年である、老年は老年である。何も壯年老年の者が青年の前にビクビクして居なければならぬといふ理由はない。露西亞あたりの小説家の書いたものゝ中にも、青年を讚美して老年を侮つたものは尠くない。併し乍らそれらは或意味に於て青年に阿つたものとも言へる。文藝家は預言者であつて、其時代の風潮になじんで居る覺醒なき壯年以上の者とは步調を共にすることが出来ないで、次の時代を形作るころの青少年と心持が一致することになるのであるといふ様な議論もよく聞くことであるが、それも半面の眞理で、文藝家が預言者であるといふことゝ、文藝家は青年と步調を共にせなければならぬといふことゝは全然別問題である。新文藝の皮相を見て直ちにそれを受け賣する青年文學者は預言者ではない。況して其青年文學者の前に常に戰々兢々として老朽扱ひをせらるゝことを怖れて居る先輩文學者は預言者ではない。私はそんなものは悉く嫌ひである。

私は明けて數へ歳四十四歳になる。四十四歳になつた以上は私は此四十四歳といふ年齢に自信と誇りを持つ。私は今の私の抱いて居る文藝觀が絶對の價値を有つて居るものと信じて居る。私の使用する極めて平凡な單語が無上の權威あるものと信じて居る。どの青年文學者の議論も私の文藝觀をどうすることも出来ない。如何に新奇な用語も私の前には無意味な文字に過ぎぬ。そういふ私の立場から見ると今の俳人の一二の先輩が、常に眼の前に現れて來た青年俳人に動かされて其言説を豹變し、其作句を二三にし、議論などを試むるに當つても青年の使つた單語を其儘借り用ひて得たり賢しとして居る觀のあるのを腹立たしさを通り越して嘖き出し度い様に可笑しく思ふ。もう少し確かりは出來ぬものか。もう少し自信を持つことは出來ぬものか。

「新」といふ字を自分の作品に被せて得意で居るのは卑怯である。私は子規居士ですらもが我等仲間の最初の句集に「新俳句」と題したこと、自ら俳句界の新派と呼んだことを今になつて考へて見ると卑怯であつたと思ふ。碧梧桐君が自分等の傾向を「新傾向」と呼んだことも卑怯だと思ふ。新といふ字は青年達が眞ツ向に振り翳して年長者を脅かす言葉である。否らざれば年長者がオゾオゾこれを振りかざして青年者に阿びる言葉である。自分が從來に無い或傾向を作り得たと信じたならば宜しく其傾向の特色價値を明らかにして、これを從來の傾向のものゝ特色價値と靜かに比較研究をして見る可きである。粗笨なる新の字を附けて手ツ取早く人の注意を集めようとする如きは卑怯なる所爲としなければならぬ。新とは何ぞや。それは随分出鱈目な粗笨な言葉である。俳句界の人々も漸く進歩した綿密な頭を持つ様になつて、此等の言葉に脅かされることは餘程少くなつて來たことゝ思はれるが、而も尙ほ新の字を冠させた文學論や單語などに或時はビクビクしたり或時は恐惶がつたりするのは見苦しい次第である。

(大正6年1月「曲水」)

俳句所感

三百號を記念する爲に種々の計畫を持つて居たが、私の病氣の爲に頓挫しました。

私の病氣はもう宜しいのでありますが、まだ病餘の人といふ考がありまして、何事も思ひ切つて遣れませんが、なまじひ思ひ切つて遣れぬ位ならいつそ何も遣らぬがいゝと思ひまして、三百號も普通號と少しも變らぬものと致しました。たゞ表紙だけを變へた位の事でした。

たゞ三百號といふ格段な號である爲に、聊か俳句に就いて所感を陳べて見ようと思ひます。それも極く簡単であります。

二百號から三百號に移る八九年間の我が俳句界は、穩健に歩を進めて來たと言つてよいと思ひます。

世間往々にして、平明にして餘韻ある句といふ當初の主張に裏切つて、近來の句は、稍々晦澁にして餘韻の乏しい句が多いといふ非難があるかと思ひます。近來の句は無味乾燥な寫生句が多いといふ非難も一方にあるやうに思はれます。

併し平明にして餘韻ある句といふ主張は、昔も今も變りはありません。當初の主張は主として新傾向句に對して發したものでありますが、今も尙は彼の晦澁にして難解なものには同じません。飽迄も平明なる調子を喜び、餘韻ある句を推稱します。併し乍ら寫生を唱道した結果、寫生の清新ならんことを力める結果として、稍々調子の佶屈なるものを生ずる事も亦止むを得ない結果と思ひます。言はゞ之れは一時的現象と見るべきだと思ひます。其技が進めば必ず平明に落着くに極つてゐます。清新なる客觀描寫を試みて、而も平明なる句を得るのでなければ

ば、未だ其技倆に到らぬものといふ事が出來ます。調子の佞屈なものは要するに未だ不熟なものであります。不熟ではありますが、陳腐にして生氣なき句に比ぶれば勝つてゐます。さう言つては失禮ですが、ホトトギスの句を佞屈だと言つて批難さるゝ方には、大概作句熱が旺盛でなくつて、平明な平凡句を作つて居らるゝ方だと思ひます。さういふ人から見ればホトトギスの佞屈な方面ばかり眼に映つて、一概に佞屈々々といふ批難が起るのだらうと思ひます。ホトトギスの俳句は決して佞屈な句ばかりではありません。平明ならん事を欲して未だ其境界に到らぬものが交つてゐるに過ぎないのであります。併し乍ら其佞屈なるものにも寫生の上の努力は十分に認めて遣らねばならぬものがあります。何が一番進んだかと言ふに、此の寫生の技倆程進んだものはありません。此の壹百號間の俳句の進歩は、一に此の寫生の技倆に在ると言つていゝと思ひます。平明なる寫生句も今の雜詠に多々見受けることが出來ると思ひます。決して難者の意を勞するに當らない、立派な平明な句も多々あると思ひます。併し中に交つてゐる多少佞屈の嫌ある句も、其寫生の技倆に於て所謂平明な平凡句に勝ること萬々であると言はねばなりません。さうして其技倆が進歩すれば、是等佞屈の句も亦平明な句に進むべき可能性を持つてゐるのであります。

次に客觀の寫生は無味乾燥に陥り易い、主觀のうるほひのある句が欲しい、といふ要求は屢々聞くとゝあります。所謂うるほひのある主觀句は容易に得られるものでありません。大概うるほひのある主觀句として推稱されるところのものも、私から見ると平淺な安價な主觀句としか見えません。その點になると難者と私との頭の相違によるのでありますが、併し難者と雖も若干の歲月を経過して見れば、私の言が偽らなかつたことを知らるゝ場合もあらうと思ひます。由來主觀句は一寸刺戟が強いものであります。何物かを要求して居る時には、取り敢へず共鳴するものであります。併し飽き易い。見ざめがしやすい。厭味になりやすい。幼稚な感がつきまふ。歲月が經過しても尙ほ價值のある句といふものは極めて稀であります。雜詠に主觀句の少ないのも自然の事